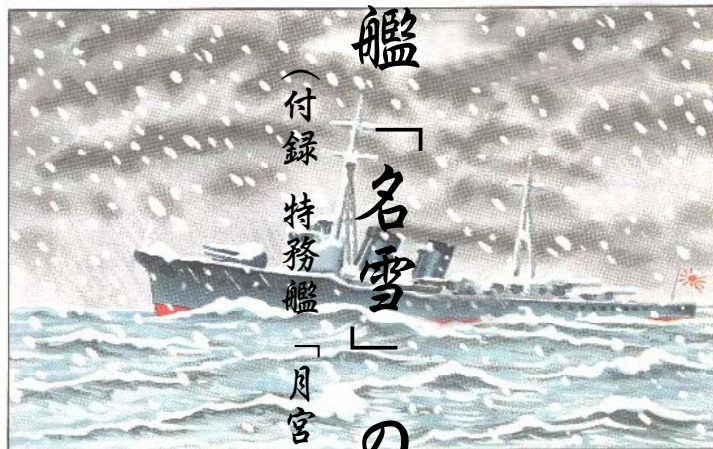


駆逐艦「名雪」の生涯

(付録 特務艦「月宮」の生涯)



昭和8年藤永田造船所における名雪進水式で配られた絵葉書

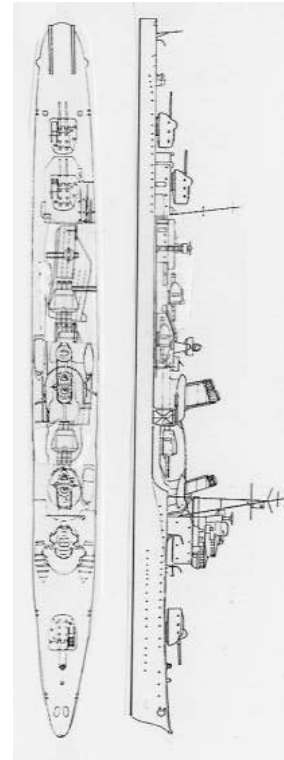
帝国海軍の駆逐艦として吹雪クラス(特型)は余りに有名である。

その一番艦から四番艦までには雪の名前が当てられている。すなわち、吹雪、白雪、初雪、深雪である。これらは、一時期を除くと第11駆逐隊を編成しており、常に行動を共にしていた。しかし、ここに不幸な事故が発生する、昭和9年、演習中に駆逐艦雷に衝突された深雪が失われたのである。第11駆逐隊は定数に足りない3隻編成で行動する事になった。

当時、吹雪クラスの駆逐艦は建造を全て終えて、次の初春クラスの建造が始まっていた。初春クラスは吹雪クラスよりも300トンも小さな排水量で特型に匹敵する重武装(砲数が一門少ないだけ)を目指したのであるが、これが無理な設計であるという批判も、軍令部内に存在していた。多くの議論の結果、すでに生産が終了している特型のライン図を流用して、初春クラスと同様の武装(ただし、砲は吹雪クラスに準ずる)を搭載する、比較検討用の駆逐艦建造案が出てきたのである。これは結果的に深雪の喪失を補う事になった。

初春クラスに対する懸念は現実のものとなり、昭和8年に竣工した初春を始め

とする各艦は、所定の性能を發揮し得ず大幅な改正が必要となった。それに対して、追加建造された特型駆逐艦は良好な試験結果を残している。これにより、初春クラスの設計上の欠陥が明らかになり、初春クラスの建造は4隻で打ち切られ、設計を大幅に改正した有明クラスの建造に移行したのである。なお、ロンドン条約による補助艦艇の制限もあって、特型の追加建造も一隻だけに終わり、昭和9年に竣工し名雪と命名され、深雪の後を埋める形で第11駆逐隊に編入された。



「名雪」昭和9年新造時の状況を示す

名雪とは「名ごり雪」の意味である。命名にあたっては、深雪の後を埋めるといふのと、吹雪クラスの最後の艦という意味を込めているものと思われる。

名雪は建造時期が大幅に異なるために、特型の他の艦とかなり異なっている。駆逐隊を構成する他の艦は初期のI型であるが、名雪のベースとなったのは最終型であるIII型であり、空気予熱器等が強化されており機関重量の軽減と航続距離の増大に寄与している。このために、I型で4缶あったボイラーは3つに減少し、第一煙突が細くなっている。

ただし、名雪には何故か他の特型よりもボイラーの圧力の上昇に時間がかかるという欠点があった。これは当時における品質管理技術の限界を示しているのかもしれない。その代わり、最高速度はしばしば他の同型艦よりも2ノットの優速を示しており、「名雪は起こすのに苦労するが、その気になれば速い」と言われていた。しかし、歴代の機関長は「起こす」のに苦労したようである。

名雪はまた他のIII型と同じく、艦橋構造物も大型化しているが、最も大きな相違点は魚雷発射管であろう、名雪の水雷兵装は初春型に準じており、他の特型と

大きく異なっている。次発装填装置を装備しているのは名雪のみである。なお、名雪の竣工後した昭和9年には、水雷艇友鶴の転覆、第四艦隊事件が発生して、これを契機とした性能改善工事を、後に名雪も受ける事になった。

同じ隊の艦とやや異なるシルエットは美しいと思われるようであり、艦船ファンからも好まれていた。

吹雪クラスの搭載魚雷は新造時には8年式2号であったが、後には90式に変更されたものの、最後まで酸素魚雷は搭載されなかった。しかし、名雪は93式酸素魚雷が使用できるように改造されたという説もある。

開戦後、名雪はエンドウ沖海戦、サヴォ島沖海戦、第3次ソロモン海戦、クラ湾夜戦などに参加した。機関の不調により、しばしば会戦に遅れかかったが、重要な局面には必ず間に合った。特筆すべきは、クラ湾夜戦における名雪の活躍であろう。

当時、名雪はコロバンガラへの輸送任務についていた。昭和18年7月5日、

第3水戦司令秋山輝男少将の率いる増援部隊は以下の編成でショートランドを攻撃した。

支援隊Ⅱ新月、涼風、谷風

第一次輸送隊Ⅱ望月、三日月、浜風

第二次輸送隊Ⅱ天霧、初雪、名雪、長月、皐月、美風、美汐

しかし、アメリカ側は日本側の行動を察知しており、エーンズワース少将率いる艦隊（軽巡ホノルル、ヘレナ、セントルイス、駆逐艦4隻）に待ち伏せ攻撃を命じた。

深夜2336、コロバンガラ島北東の海域で、アメリカ艦隊は新月をリーダーで捕捉、しかし、直後の2348に日本側もアメリカ艦隊を視認、秋山少将は艦隊に集結を命じた。

2356、エーンズワース少将は砲撃を命令、6インチ砲弾が支援隊に属する

3隻の駆逐艦を襲った。5分間で千発以上に達する射撃により、秋山少将の座乗する新月はたちまち火災を起こし波間に没した。

この段階でエーンズワース少将は日本艦隊が壊滅したと信じ、掃討のために、艦隊に回頭を指示すると同時に、駆逐艦に対して雷撃を命令した。しかしその時、涼風、谷風は雷撃を終えて次発装填のために退避行動に入っていた。

0002、ヘレナの艦首が目もくらむような閃光を發した。ついで4本の水柱があがる。ヘレナは艦体の前部をもぎ取られ、前のめりになって沈没した。

次に敵に接触したのは第二次輸送隊であった。各艦は砲撃を開始すると同時に、敵に雷撃を加えたが、いずれも命中しなかった。初雪は被弾して舵機の故障を起こし、圧倒的な形勢の不利に、日本側は退避にかかった。

ヘレナを失ったものの、エーンズワース少将は依然として勝利を確信していた。敵の魚雷を全て回避したので、すでに日本側からの雷撃はないと判断していたのである。

この時点で、アメリカ側は次発装填装置の存在を知らなかった。そして、二次

輸送隊では、名雪のみがこれを装備していた。次発装填を終えた名雪は、再度魚雷を發射、ホノルルに3本、セントルイスに1本の魚雷が命中した。ホノルルは轟沈し、エーンズワース少将は戦死した。セントルイスは大きく傾斜しながらも辛うじて戦域からの離脱に成功する。この後、第一次輸送隊による散発的な攻撃が試みられたが、アメリカ側が退避したために戦闘は終了した。

日本側は新月を失ったが、軽巡2隻を撃沈、物資の揚陸にも成功したのである。余談ではあるが、名雪とは反対に旧式駆逐艦美風と美汐は魚雷を全て揚陸してその分大量の米を搭載しており、これによって生命を救われた将兵は多かった。

名雪は大きな損傷を受けはしたものの、戦争を生き抜いて、戦後は復員輸送任務につき、後に防波堤として艦体が利用された。

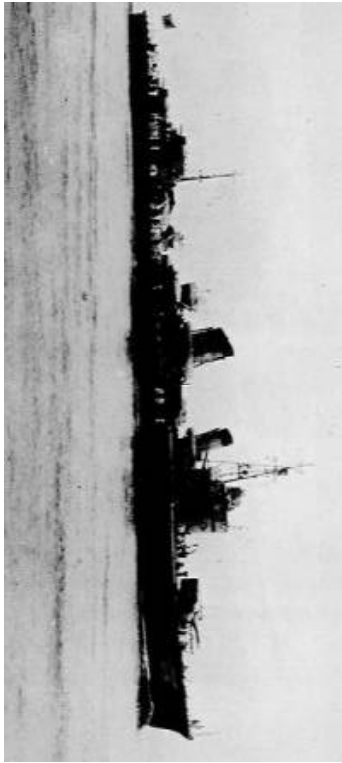
名雪の指揮官で最も有名なのは水瀬少佐である。眠ったままで戦闘指揮をしていたという豪傑ぶりは、今でも語りぐさになっているという。

実は、クラ湾夜戦の時も、物資の搭載のために輸送隊は予備魚雷を降ろす事に

なっていたのだが、副長が作業の許可を求ようとしても、どうやっても目が覚めず、そのままで出撃したという逸話も残っている。

お孫さんの水瀬秋子さんの回想によると、「おじいさまは「ふあいとだよ」というのが口癖で、敵性語であるとして上層部からは批判されたそうですが、乗員の受けは良かったようです」との事である。

秋子さんにはお嬢さんが一人いらっっしゃるが、「おじいさまの大好きだったおフネ」にちなんで「名雪」さんと命名されている。



昭和12年性能改善工事後の名雪

(付録 特務艦「月宮」の生涯)

特務艦「月宮」は、元来、能登呂型の給油艦として予算が成立したが、その後給糧艦として設計変更されたのは間宮と軌を一にしている。要目も間宮とほぼ同じである。

なお、月宮という名称は間宮と同じく海峡名と思われるが、同名の海峡がどこであるかについては、比較的規模が小さいのか諸説ある。間宮に対しての、名称のバランスをとるのを優先させたのかもしれない。確かに間宮と月宮という艦名の対比は美しく感じられる。

月宮は給糧艦として艦内に多くの設備を有しており、アイスクリーム、羊羹、最中、ラムネなどの菓子類や豆腐、蒟蒻等々、おそよ日本の食生活に必要なものはなんでも供給できる能力があった。戦艦、空母、巡洋艦といった華やかさはないが、縁の下の力持ちとして、だから愛される艦であったと言える。

しかし、月宮は必ずしも幸福な艦とは言えなかった。就役してからさほどた

ぬ、昭和3年に北方海域で航行中に座礁したのである。

艦体の損傷は軽微であったが、離礁は困難を極め、結局船体は放棄された。それから実に7年の間、月宮はそのまま置き捨てられたのである。周囲の条件が悪いために、解体も行われなかったのである。月宮はそのまま打ち捨てられる運命にあるかのようにだった。しかし、7年後の昭和10年、放棄された月宮は再びよみがえった。ある技術士官の独創的なアイデアと熱意によって奇跡の離礁に成功したのである。「うぐう」という艦体のきしみと共に月宮は再び海に浮かんだ。

寒冷地であったために、状態は予想以上に良好であり、生まれ故郷である神戸川崎造船所で再び給糧艦としての艤装を受けて、連合艦隊に復帰した。なお、この際に水上機搭載設備が追加され、月宮は簡易な水上機母艦としても利用できるようになった。

新たな月宮の姿を目にした人々は「月宮の背に翼が生えた」と感想をもらしたそうである。

このようにして、月宮は再び給糧艦として多くの海軍軍人に愛されるようにな

った。昭和20年、同型艦である間宮は潜水艦攻撃によって沈没したが。月宮はそれまでの不運を取り戻すかのように生き延びた。

戦後は海上保安庁に移管され、灯台補給船として働いた。何分にも古いフネであり、その後ある自治体に引き取られて、浮かぶ公民館として使われていた。そして老朽化によって解体されそうになったが、ありし日の月宮を知る人々の運動によって、現在は同じく海軍特務艦であった「宗谷」と並んで船の科学館に保存されている。

月宮に関するエピソードは多い、ある人は艦内に生け簀があり、新鮮な鮎の塩焼きをご馳走になったという手記を残している。現在、多くの人に親しまれているタイヤキも月宮が発祥の地であるという説がある。これによると、艦内で仕事をしていた軍属の和菓子職人がラクガンの型にヒントを得て作った「餡入り鯛焼き饅頭」が元だという。その真偽は定かでないか、間宮羊羹と並んで月宮鯛焼きが多くの軍人に好まれていたようである。

本書は基本的にフィクションですが、ノンフィクションも含まれている始末に困る本です

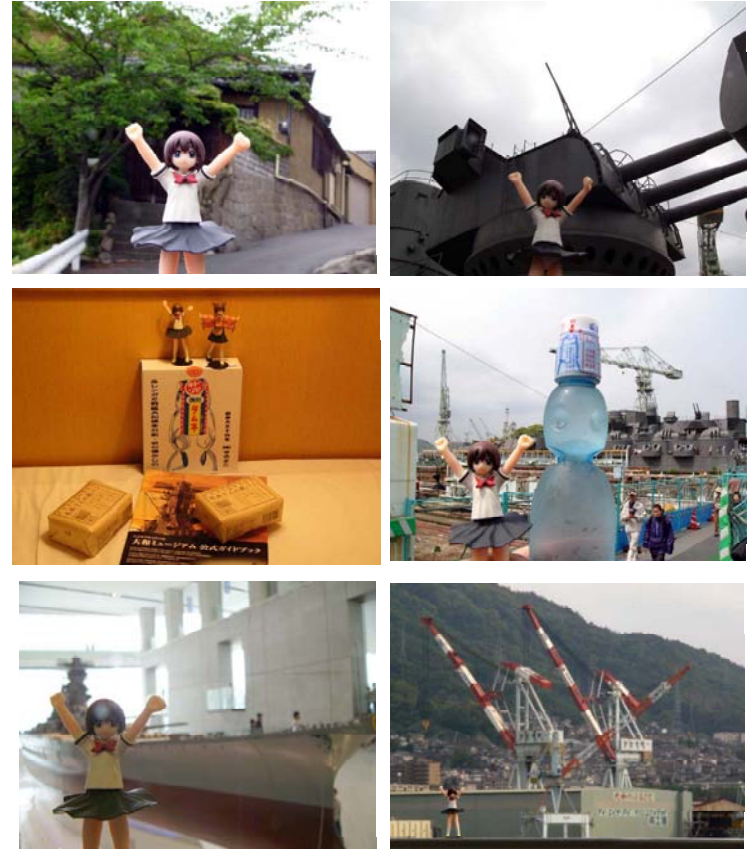
あとがき

最初に駆逐艦「名雪」の生涯を出してから5年近く経過してしまいました。一発ネタにも係わらず、多くの人に喜んで貰えたようで嬉しく思っています。それだけでなく、「2Kさんはこの「名雪」の設定に基づいた模型や小説を作って下さいました。本当にありがとうございます。」<http://www.madlab.gr.jp/~takayama/U-2K/nayuki-top.html> 名雪と「名雪」(原案:ブラック・ストーン/著:U-2K)」

Kanonはあれから一度アニメ化されましたが、Airや涼宮ハルヒの憂鬱といった素晴らしき作品を生み出している京都アニメーションで再度アニメ化されるそうで今から楽しみです。軍艦ネタとしては、最近は映画「男たちの大和」などのヒットもあって、軍艦に対する関心も昔よりは高まっているように思います。軍艦と美少女萌えを結びつけた「タクティカルロア」といった作品もありました。

大和と言えば、現在大和ミュージアムの館長(艦長?)をされている戸高一成さんと以前に飲む機会があったとき、この「名雪」の話をしてみた事があります。戸高さんの感想は「面白い」というものでした。たぶん、ご本人は忘れているでしょうが。(笑)

駆逐艦名雪の生涯



かみちゅ！呉・尾道ツアーより（笑）

駆逐艦「名雪」の生涯

（付録 特務艦「月宮」の生涯）

平成18年8月12日増補第3版発行

企画 軍事史通信HARUNA

編集・発行 ブラック・ストーン

発行所 軍事史通信HARUNA

協力 SGC・SFアラモード

印刷 ウチのプリンター

harunanet@excite.co.jp

誤字・脱字・乱丁・落丁は笑って許して下さい